主体の自由を脅かすもの[1]
ー悪霊と培養槽ー

01QD1002 壁谷 彰慶

自分の意志が何者かによって操作されたものであると考えたとき、私は自由を奪われているような感じを得る。

この「自由を奪われる感じ」、もしくは奪われたほうの「自由な感じ」を、デカルトの悪霊の欺きやパトナムの培養槽の脳の懐疑を素材にして考えるのが本稿の主題である。これら二つの懐疑的想定は、ともに外的実在に関する懐疑であると同時に、主体の経験世界を構成する超越者に言及することで、主体の自由を否定する議論とも読みうるからである。

1 悪霊と培養槽

いくつか確認をしておく。一般に「自由意志」とは、世界への働きかけを自発的に／随意に制御する能力と理解される。本稿では、「意志」とは行為を説明するなんらかの心的状態（欲求、信念、意図など）の総称として理解し、そのうえでわれわれの「自由な感じ」が許容できる範囲を問う方向へ進む。また「主体の意志を決定する」ということで問題にするのは、意志生成の決定であって、主体のふるまいの決定ではないことも強調しておきたい。たとえば「ある人が＜タバコを吸おう＞という意志を操作される」という事例で本稿が念頭に置いているのは、「彼がタバコを吸おうとするのに吸えない結果に陥る」という状況ではなく、「(なぜだか) 彼がタバコを吸おうとしなくなる」という状況のことである。

さて、『省察』にてデカルトは、本当は自らの感覚は誤ったものであり、一切の外的事物は悪霊によってみせられた夢にすぎないという疑いを提起する(『世界の名著 27』243 頁 第一省察)。またパトナムは、言語の指示に関する内在主義的説明と因果的説明への反例として次のような疑いを提示する。すなわち、ある人の脳は科学者によって身体から取り出され水槽内で培養されており、その人の経験する世界は、実は脳の神経の末端を介して接続された超科学的コンピューターによって見せられているものかもしれない、と (Putnam(1981), pp. 5-6. 邦訳 7-8 頁)。

悪霊の設定も培養脳の設定も、ともに外的実在に関する懐疑である。しかし同時に自由意志を否定する懐疑論とも読める。このことには説明が必要だが、どちらも「世

界が＜本当に＞どのような仕組みで成り立っているのか」を問うものだとすれば、二つの問題が一致するのも頷けるだろう。

ここで、主体が経験する世界を「経験世界」と、その世界を構成している事実を述べる際に言及される世界を「超越世界」と呼ぶことにすれば、どちらの例も、悪霊やコンピューターという超越者が、主体の経験世界に影響を及ぼすという図式になっている。但し培養槽の設定では、超越世界において作用を被るものとして、「脳」と言う、超越者と経験主体以外の、第三の存在者が登場している。

2 超越者の影響力の四様式

さて、超越者が経験主体を「決定する」というとき、少なくともその効力は、次の二つの観点から様式の区別が可能となる。

まずは、超越者が経験世界を常に監視しているか否かという観点である。常に監視しながら世界を操作するということは、超越者は、経験世界の内部で流れるのと同じ時間を共有するということでもある。他方、常時の監視はなしに、一度切りの操作を世界に加える超越者も想定できる。これは、最初にスイッチを押しただけで被造世界内の時間をも作り、あとは手放しで世界の成り行きを見物している超越者、というイメージに対応する。

もう一つの観点は、超越者が影響を与える範囲が、主体のみか主体込みの世界であるのかという区別である。すなわち、経験主体の意志のみを操作するのか、意志も含めた主体が経験する世界全体を構築するのかの二つの区別である。後者であれば、意志と経験世界は同時に密着しながら構築されていく。

この二つの観点から、「超越者が決定する」という事態には、少なくとも次の四つの理解が可能になる。

（1）主体の意志を、監視しながら操作　（ラジコンモデル）
（2）主体の意志を、操作して放任　（あらかじめ主体に傾向性やプログラムを植えつける）
（3）主体の意志と経験世界を、監視しながら構築　（順次に意志と世界を構築）
（4）主体の意志と経験世界を、構築して放任　（ビデオテープモデル）

対比を見るためにも、ここでは（1）と（4）のみ説明しておきたい。この二つは、経験主体にとっては未経験の事柄、つまり経験世界では未来の事柄が超越者にとっても未決定なのか、それともすでに超越者によって決定されているのかという違いでも

ある。（1）の決定様式であれば、超越者はたえず経験主体の意志を監視しつつ、それと独立にある世界と照合させながら、自らの設定した計画に沿う仕方で彼を制御していくことになる。他方（4）の決定様式であれば、未来の事柄はビデオテープのようにデータ化されて蓄積されており、それがビデオデッキを通した映像のように体験像として主体に流れていくことになる。このとき主体の能動性は希薄になり、夢見の状態に近いものとなる。

3 自由な感じを脅かすもの

先に述べておけば、（1）の決定様式が最も自由な感じを脅かすように思われる。以下、四つの様式を簡単に検討しながら、そのことを説明してみる。

まず、意志と世界を同時に構築する（3）と（4）の形での超越者について。こうした超越者は、主体の能動性を奪ってしまうほどに絶大な能力を持つが、しかし意志生成の自由を操作している感じがしない。この点にはさらに議論が必要だが、主体の意志と世界は、別個のものとして理解したいのである[2]。

次に（1）と（2）の意志操作型に関しては、意志を監視しつつ操作する（1）のほうに、自由が奪われている感じを得る。脅威は、主体の意志を常に解釈しつつ、主体と同じ時間を共有しながら操作する超越者の存在によって最も強く与えられると私は考えるからである。この私情を以下説明しておきたい。

解釈する超越者は、主体と同様の心的状態を持つことができるゆえに、おそらく自身の更なる意志を持って介入していると考えられる。タバコを吸いたい経験主体を、世界全体の効用を考えつつ「彼にはタバコを吸わせたくない」という意志をもって主体の意志を操作するのかもしれない。もちろんその超越者は、明確な意志もなく気紛れに、主体の意志に介入すること自体を目論んで作用していてもよい。いずれにしろ、自分の意志が他人の意志に従属させられてしまうことが、何より自由な感じにとって致命的ではないだろうか。

またこのように考えると、「脳」を刺激するか、意志を解釈しながら操作するのかという、操作方法の違いにも考察を進めることができる。パトナムのオリジナルの設定では、超越世界のコンピューターはその世界にいる科学者によって設計されたものであり、彼は主体が経験世界において抱く意志を読み取りつつ、主体を操作（（1）に相当）ないし操作するプログラムをコンピューターにインプットしている（（2）に相当）。だが、この設定から科学者を退場させることもできる。超越世界では（なぜだか）初めからコンピューターが単独で作動しており、自動的にその世界を支配する自然法則にしたがって「脳」に刺激を与えているのである（そのコンピューターは、ある心的

状態を物理的信号に置換し、あるパターンの信号が「脳」から検出されれば、逆に特定の信号を「脳」に送り返すようにプログラミングされていることにより、主体の心的状態を変化させるのである)。このとき、自由感への脅威は弱まると考えられないだろうか。主体の意志を解釈できない存在者には、主体の意志を支配することもできないからである。

すなわちここから、「機械論的決定論 vs 行為主体の自由」という対立は不可避的なものではないと言えるかもしれない。少なくとも私は、機械論的決定論と自由感は撞着するものではないと考える。その意味では私は、決定論と自由意志の関係に関して、両立可能論の立場を取ることになる。

繰り返しになるが、われわれの自由感を脅かす一つの要因は、主体の意志を解釈できる他者によって操作されることであると考える。その解釈能力には程度差があるが、ありのままに解釈できる他者がいれば、それは強力な脅威となるだろう。そして自由意志論として読み換えたときの「悪霊」や「科学者」の懐疑の気味悪さは、経験世界に見出されるのと同様の他者が超越世界にいるような雰囲気を与えることに、起因していると思うのである。

注

[1] 本稿は、2004 年 6 月 19 日に科学基礎論学会（於聖心女子大学）研究発表にて使用した原稿（「悪霊と培養槽」）を、一部修正して改題したものである。

[2] 意志と世界の同時構築型（（3）と（4））と、自由意志の問題とのすれ違いについては、今後の課題ということにしておきたい。なお、これに関連してさらにもう一つの例、ファン・インワーゲンの火星人の例をあげておく。それは、われわれ地球人の脳内に実は気づかれないような仕方で—原理的に追跡不可能な仕方で—、各人の人生全体に関するプログラムの入った微小装置が、生前から埋め込まれているのかもしれない、という想定である(*An Essay on Free Will* p.109)。設定上この火星人は（2）のタイプに対応しているが、プログラムを植えつけるだけでなく地球人を絶えず監視しつつリモート・コントロールするような、（1）のタイプの火星人を想定することも可能である。

だが、この設定の火星人を、地球人の世界構築をしている（3）や（4）のような超越者として考えるには困難がある。すなわちこの設定では、登場する世界は一つしかなく、超越者と経験主体という区別は、超越世界と経験世界という二つの世界間の区別ではないように思われるのである。その意味で、デカルト・パトナムの例と、火星人の例との間には大きな相違がある。

文献

デカルト 「省察」 『世界の名著 27』 中公バックス 1978 年 223-207 頁

Putnam, H. (1981): *Reason, Truth and History*, Cambridge: Cambridge University Press. (邦訳：野本・中川他訳 『理性・真理・歴史』 法政大学出版会 1994 年)

Van Inwagen, P. (1983): *An Essay on Free Will*, Oxford: Oxford University Press.

(かべや　あきよし／社会文化科学研究科)